

「防災・まちづくり『熊本地震を体験して』

～必要なのは、備えとつながる力～

講師：熊本県民交流館パレア館長 藤井宥貴子さん

開催日：6月7日（金）

参加者 30名

熊本県民交流館パレアより藤井宥貴子館長にご講演いただいた。藤井館長は熊本市男女共同参画センターはあもにい館長在職中、熊本地震に遭い、その後の避難所運営を経験され当時の経験から、今、備えておくこと、考えておくことについてお話しいただいた。

講演は、発災当時の熊本の町を映しだしたDVDの映像から始まった。当時の緊迫感、また恐怖感を感じることで自分事としてその後の話を聞くことができた。藤井館長の講演では、個人としての震災に対する備えだけでなく、発災後の避難所運営についても経験をもとに詳しくお話しいただいた。ここでは大きく分けて3点の内容があった。



1点目は、多様な見方で物事を判断すること。避難所では非日常の状態を大人数で過ごしていくことになる。そこには少数派や弱者が見過ごされてしまう危険性がある。緊急時であっても様々な視点（女性・子ども・障がい者・性的少数者、外国人など）で見直したり、意見を出し合ったりして決定し、また改善していくことが必要である。男性のみが避難所運営を決めると、女性の視点が欠落し、女性が過ごしにくい避難所となってしまう。さらに、平時に起こることは非常時にも起こるそうで、性被害、性暴力、DVの対策も行われたとのことだった。

2点目は避難所運営は住民主体であることが望ましいこと。避難所運営は行政が中心に行われるが、行政だけが行うことが最善ではない。行政職員は発災時から災害の対応、被災者の支援を行います。しかし、自身の家族を後回しにし、休むことなく支援を続けると支援者自身が疲弊し支援できなくなってしまう。支援者の支援を行う体制作りとともに、住民主体で避難所を運営することも大切だそうだ。住民が意見を出し積極的に運営することでコミュニケーションと主体性が生まれ、より良い避難所となっていく。



3点目は、平時につながりを作っておくこと。被災地への物的支援もそうだが、被災した時のノウハウを共有し、適切なアドバイスを送りあえるつながりが、とても助けになったとのこと。避難所運営は当然初めて。そんな時、震災を経験した町から電話で、やるべきことを伝えられ勇気と安心感をもらえたそうだ。経験を次に活かし、減災につなげる。このネットワークの構築を強く訴えられた。